

今年度の教育実習が終わりました

■今年度の教育実習の概況

今年は37名の秋美生が全国各地の学校で教育実習を行いました。大きなトラブルもなく、全員が実習を無事終えることができました。

北は北海道、南は山口県まで、全国各地で教職課程の学生が教師の仕事を実際に体験しました。私たち教職支援室の特任教授も、すべての実習校に訪問して研究授業や実施後の反省会等に参加し、実習に一生懸命取り組む学生の姿を見ることができました。

全国的に実施時期が早まる傾向が見られます。半分程度の学校が5月から6月にかけて実施しています。おそらく来年度以降もこうした流れが続くのではないかと予想しています。

令和6年度 教育実習の概要（単位：人）

都道府県	中学校	高校	計	
北海道		2	2	
青森	5	4	9	
岩手	1	1	2	
秋田	秋田市	9	3	12
	秋田市以外	1		1
山形	1		1	
福島		1	1	
茨城	2	2	4	
東京	1		1	
新潟	1		1	
長野	1	1	2	
山口	1		1	
計	23	14	37	

■「教育実習報告会」から

本年度の教育実習報告会は、10月7日、15日、12月2日の3回に渡り、それぞれ2会場に分かれて開催しました。司会進行をはじめ受付や計時などを分担して自分たちで運営を行い、一人一人の実習報告をもとに、建設的な協議が行われました。



お世話になった先生方や子どもたちへの感謝とともに、教育実習だからこその学びが共有されました。

主なものを紹介します。

○社会人としてのルールやマナーを守ることの重要さ

を実感し、人間として成長できた。

○目の前の生徒を理解し、生徒とともに授業をつくっていく中で、改めて美術の楽しさを実感できた。

○生徒とのコミュニケーションを図るためには、何よりも自分自身をオープンにすることが大切である。

○生徒との“ちょうどよい距離感”を探し続ける毎日であった。

○先生方の生徒を思う真剣さや熱心さを実感し、「子どもたちに恥じることのない大人」としての“後ろ姿”を学んだ。

○先生は大変というイメージだったが、大変だけどころ以上にやりがいのある仕事であると感じた。



実習生代表のあいさつから



小原海李さん

毎年生徒が入れ替わる学校では、常に生徒一人一人の特性などに応じた対応が求められます。実習を通して、目の前の生徒を理解し、よりよい関わりを模索する日々が続きました。実習を終えた今、変化する状況に寄り添って、適切に対応する力を身に付けることがいかに大切であるかを実感しています。これは、学校や教員に限らず、社会や家庭においてもとても重要なことだと考えています。

個人的なことですが、私自身の小中高時代の教師に対するイメージは決してよいものではありませんでした。しかし、実習を通して、教師が常



葛原圭斗さん

に子どものことを考えながら、実に多岐に渡る業務に取り組んでいるのを目の当たりにして、かつてお世話になった先生方に心から感謝の気持ちを持つことができました。これまでの自分自身の人の向き合い方を根本から変える必要があることを痛感させられた教育実習でした。

学校体験実習1を終えて

○はじめに

「学校体験実習1」では、前期の「教職入門」を踏まえ、「学校の組織的な取組と指導体制」というテーマのもと、秋田西中学校における訪問体験実習や事前事後のグループ協議、講話会などを通して、「学校における組織・チーム」についての理解を深めました。

10月1日(火)	全体計画説明、グループ編成
10月8日(火)	履修カルテの作成
10月22日(火) 10月29日(火) 11月5日(火) 11月12日(火)	事前の活動 ・講話会Ⅰ(秋田西中学校長) ・秋田西中学校の運営組織 ・訪問時の観察の視点
11月19日(火) 7:40~12:00	秋田西中学校訪問体験実習 ・朝の生活の観察、授業参観 ・講話会Ⅱ(学年主任) ・講話会Ⅲ(生徒指導主事)
11月26日(火) 12月3日(火) 12月10日(火)	事後の活動 ・グループごとの分析・考察 ・レポートの作成

○講話会Ⅰ

10月29日(火)には、秋田西中学校の三浦校長先生をお招きし、学校経営における組織・チームの重要性についてお話していただきました。



三浦純也校長先生

学校教育目標の具現化に向けた経営方針や具体的な取組について説明いただくとともに、演習を通して、諸課題に対して組織で対応することの重要性をご教授くださいました。

また、「答えは生徒が出す」「迷ったら手間のかかる方を選ぶ勇気」「最良の授業こそ最善の生徒指導」「前例踏襲は後退」「(教師が)何をしたかではなく、(生徒が)どうなったか」など、示唆に富むお話に多くの学生が感銘を受けていました。

○秋田西中学校訪問体験実習

11月19日(火)には、秋田西中学校での体験実習を行いました。早朝から学校を訪問し、登校指導をはじめ、朝自学、職員打合せ、朝の会、休み時間や授業の様子など学校生活全般において、生徒の主体性や社会

性を育むために、先生方がどのように関わり、どんな働きかけをしているかなどの視点で観察することに努めました。また2年部主任の小林由香子先生、生徒指導主事の葛西武史先生から、それぞれの立場で組織的な取組の実際や、指導体制の構築における留意点などについてお話していただきました。



登校指導の観察



朝の会に参加

<訪問体験実習の日程>

8:00 ~ 8:10	登校の様子、登校指導の観察
8:10 ~ 8:35	朝自学、朝の打合せの観察
8:35 ~ 8:45	朝の会の観察
8:50 ~ 9:35	はじめのセレモニー 講話会Ⅰ(2年部主任)
9:45 ~ 10:30	授業参観
10:40 ~ 11:25	講話会Ⅱ(生徒指導主事) 終わりのセレモニー

○事後の活動

11月26日(火)以降は、訪問実習を通して気付いたこと、感じたこと、学んだことを班ごとに分析・考察する活動を経て、「学校の組織的な取組と指導体制」というテーマに迫るプレゼン資料の作成に取り組みました。報告会では、各班から鋭い着眼点や優れた分析力に基づく発表が続き感心しました。今後の授業研究・授業実践に生かしてほしいと願っています。



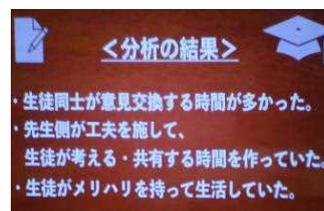
1班の発表



3班の発表



4班の発表



プレゼン資料画面(3班)

学校体験実習2を終えて

1 ねらい

2年次学生を対象とする学校体験実習2では、1年次に行った「教職入門」と「学校体験実習1」の実習経験を踏まえつつ、美術科指導に焦点を絞った実習を行います。これにより、中学生や高校生とコミュニケーションをとりながら展開する授業の進め方について、実感をもって体験することをねらいとしています。

2 実習の概要

10月 事前指導

【学校体験実習2】

11月13日 秋田県立秋田南高等学校

11月20日 秋田県立新屋高等学校

秋田市立山王中学校

11月下旬～12月 事後指導

事前指導では教育現場で教鞭をとっている中学校と高等学校の美術科教諭を招へいし、校種を踏まえた美術科の指導法や生徒指導上の留意点等について学びました。学習指導案の検討・協議を経て模擬授業を繰り返し行い、実習本番に備えました。事後指導では、実習の成果と課題を浮き彫りにし、来年度の教育実習に生かせるよう取組の充実に努めました。

3 実習授業の実際

履修している2年生24名は、4人グループ6班に分かれ、次の題材で実習を進めました。

1班	「私の色物語」	秋田南高等学校
2班	「お気に入りの浮世絵を見つけよう」	秋田南高等学校
3班	「私の色物語」	新屋高等学校
4班	「お気に入りの浮世絵を見つけよう」	新屋高等学校
5班	「自分を知る・他者に気づく～紙コップを高く積もう～」	山王中学校
6班	「お気に入りの仏像に出会おう」	山王中学校

実習授業「私の色物語」1班、3班

「自分自身が心を動かされた場面はどんな色だったか」を主題に、色の美しさや混色の効果を感じ取らせることをねらいとした授業でした。生徒一人一人が自らの内面と向き合いながら、顔料やアラビアゴム、ペインティングナイフなどを使い、「オリジナル絵の具」を作成し、自身の色物語を表現していました。



実習授業「お気に入りの浮世絵を見つけよう」2班、4班

本物の浮世絵に接し、浮世絵の表現の工夫や作者のねらいなどを発見し、お気に入りの一枚を造形的な根

拠をもって選び出し鑑賞を深める授業でした。各グループに分かれた実習生による手がかりとなるヒントや質疑応答の下、ルーペやライトなどを活用し、浮世絵の技法や造形的な特徴を理解し、お気に入りの一枚を見つけ、日本文化に対する見方、感じ方を深めていました。

実習授業「自分を知る・他者に気づく～紙コップを高く積もう～」5班

制限時間内に、グループで協力しながら紙コップを「高く美しく積む」という活動を通して、創造性や協働性をはぐくむことをねらいとした授業でした。軍手の着用、着席したままなどの条件の下、生徒が工夫を重ね、美術室のあちらこちらから歓声や拍手が聞こえる活気ある授業となりました。

実習授業「お気に入りの仏像に出会おう」6班

仏像に対する興味をもち楽しく学べるよう、オリジナル教材「仏像カード」から読み取った、プロフィール作成と仏像当てクイズを通して、仏像の造形的な美しさや日本文化を感じ取り、鑑賞の活動に意欲的に取り組む授業となりました。中学生が興味を湧くよう様々な視点から鑑賞する工夫、時代背景や造形的な根拠を理解することで、主体的な学習活動になりました。



4 成果と課題

各グループは話し合いや模擬授業などでチームワークを発揮し、充実した取組をしていたことは大きな成果となりました。実習授業においても事前準備が生かされ、各自が役割を果たしていました。しかしながら、生徒の実態を把握できずに臨んだ実習であったせいか、生徒の予想外の反応に戸惑う場面も散見されました。課題の一つは、選択した題材で「生徒にどのような力を身に付けさせたいのか」を意識して授業を行うことです。展開での主体的な学習活動が主軸となるものの、授業は終末をもって完結することが不可欠です。制作したまま、鑑賞したままに終わることなく、全体で共有化を図ることで思考力や判断力、表現力が高まり、ねらいに近づきます。導入→展開→終末は部分的なものではなく有機的に、体系的につながっており、全体を通して一つのストーリーになっていることが求められるのです。また、教師の基本的な資質といえる発声、声のトーンや力強さなど、教室環境や生徒の活動の様子などから使い分け、指示や説明が確実に届くよう努める必要があります。

介護等体験実習を振り返って

義務教育に携わる教員が個人の尊厳や社会連帯の理念に関する深い認識の上に立って指導にあたることは、学校教育の充実にとってとても重要なことです。「介護等体験」は、この観点から、小学校及び中学校の教諭の普通免許状取得希望者に義務付けられている実習です。本学では、この体験の実施を2年次に位置付け、社会福祉施設での体験を5日間、特別支援学校での体験を2日間（計7日間）取り組むこととしています。



さて、今年度「介護等体験」に取り組んだ本学の学生数は20名で、8月から12月にかけて秋田市内の9カ所の社会福祉施設と4校の特別支援学校で行われました。体験を受け入れていただいた施設や学校はもとより、その手配等にご難儀をおかけした社会福祉協議会並びに秋田県教育委員会の皆様には心から感謝しております。おかげさまで、学生から提出された実施報告書（感想文を含む）を見ると、一人一人が体験をとおして確かな学びを得たように感じられます。ありがとうございました。

ところで、体験自体は全員が終了したものの、学んだことを共有し合い、より確かな学びへと高めていく時間は必要なことと考えます。そこで、年が改まった1月27日(月)、事後指導として「介護等体験報告会」を行う予定です。学生の皆さんは、最後のひとがんばりです。素晴らしい発表を期待しています。

《学生の感想から（一部抜粋）》

- 乳幼児の介護体験を通じて、一人一人の発達段階や個性に合わせることの重要性を実感した。
- 特別支援学校では、あえて手を貸さずに生徒自身でやらせる場をつくって、成功体験を積み重ねることの重要性に気づかされた。
- 高齢者と接している中で、相手の気持ちを第一に考えることと、常に笑顔で接することの重要性を肌で感じた。
- 実習で出会った多くの方々から、狭かった自身の視野を広げていただいたように感じた。
- 障害のある方々が生きやすい社会にしていくなために、微力な自分でもできることがないかを考えるきっかけをいただいた。
- 介護等体験を終えた今、体験前とは違う自分になったような気がする。



教員採用試験情報

◇合格、おめでとうございます！

本年度の教員採用試験にチャレンジした3人の4年生は、全員が合格（秋田県、横浜市）を勝ち取ることができました。昨年度から本格的に対策に取り組み、専攻の学びとの両立を図って継続的に準備を進めてきた成果が現れました。

来年の4月から中学校の教壇に立つ皆さんには、本学での専門的な学びを生かした美術科教員として活躍されることを願っています。

◇試験の早期化に対応するには

文部科学省は、令和7年の採用試験の標準日を5月11日(日)と設定しています。これは、今年の6月16日(日)から、さらに1ヶ月の前倒しとなります。5月の実施となれば、出願期間は早ければ年明けから始まる可能性があり、遅くとも、3月中の出願となることが考えられます。かつては4年生の春から出願準備を始めていたものですが、これからは試験の早期化に合わせた早めの対策が必要となります。各自治体の実施要項等の発表は、早ければ今年の12月ころからと想定されますので、受験を考える皆さんは、志願先の自治体の情報に注意を払い、それぞれの教育委員会のHPなどに、こまめにアクセスすることが大切です。

◇大学3年生での試験実施の自治体が大幅に増加

本年度、大学3年生での受験（一部試験の前倒し等）を実施した自治体は、全66自治体（都道府県及び政令指定都市等）のうち、半数を超える40自治体でした。現3年生でも前倒しの試験（教職教養・一般教養）に合格した人がおり、4年生では主として美術科の専門教養の試験に臨むこととなります。

現時点（R6.12）で、秋田県や岩手県、茨城県など来年度新規に3年生受験の実施を発表した自治体もあり、今後も増加することが考えられます。こうした状況から、これからは2年生から準備に取りかかることがスタンダードとなっていくそうです。

3年生受験の実施は、集団面接や小論文の廃止などと合わせて、受験者の負担軽減による教員のなり手不足解消のための苦肉の策と考えられますが、裏を返せば、教員を目指すチャンスが広がっているとも言えます。“ブラック”なイメージばかりが先行しがちな教員ですが、教育実習をはじめとする教職課程の学びを通して、教員の魅力ややりがいを肌で感じた皆さんの中から、一人でも多く教員採用試験にチャレンジしてくれることを願っています。

教職支援室では、通年で「教員採用試験対策セミナー」を開講しており、現在（R6.12）は、7名（3年生4名、2年生3名）の皆さんが、お互いに励まし合いながら受験対策に取り組んでいます。関心のある人は、いつでも教職支援室を訪ねてください。

教員採用試験対策セミナーは“月曜5限”、「教職および博物館学芸課程センター」（教職支援室隣）で実施しています！